
高校

さやはち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校

【コード】

N7650H

【作者名】

さやはち

【あらすじ】

僕らのなんでもない高校生活。少し複雑で、少し単純な…

神野透（前書き）

久しぶりの投稿です。

今回はオリジナル。

つたない文ですがどうぞ。

神野透

サイレンが響く。教室中の人間が机の下にもぐっていると、放送でグラウンドに避難するよう指示がでる。そろそろと避難経路へ歩きだす。

「ああ〜もう、だるいなあ」

廊下に出てすぐ、三宅卓磨が僕の横にならんで言った。

「こんなのしたって、俺らがこの学校にいる間に地震なんか絶対起こんないって。あとたったの4ヶ月だぞ、卒業まで」

「うん」

僕は横を見ることなく答える。

「ツウか、避難訓練なんて事前に言っとくもんじゃないの？ほんとに抜き打ちでやりやがって、あの校長。これじゃあ、ただの悪戯じゃねえか」

「うん」

僕は前を行く一人、いや二人を目で追いながら返事をする。

「だいたい、なんで冬にやるんだよ。外出たら寒いだろうが…って、また『うん』って言うなよ。お前全然人の話聞いてないだろう？」

「うん」

僕の後頭部に衝撃がはしって、つんのめりそうになる。なにも全部聞いてなかった訳じゃないのに。

「お前、推薦で合格してからポーとしすぎ」

「だからって、グーで殴らなくても」

頭をさすりながら軽く卓磨をにらんだが、鼻であしらわれた。

「こっちはまだ受験でストレスたまってるんだよ」

知るかとは思うが、口にはしない。

実際、その頭の高さで卓磨に期待と言う大きなプレッシャーがかかっていることを知っている。

「でも、グーはなしだよなあ」

頭をさすり、そうこぼす頃には、もう玄関についていた。

グラウンドに出て視界が広がると、僕はまた、あいつとあの娘を探し始めた。グラウンドには、もうかなりの人が集まっていた。あと一番遠い三年生だけだろう。自分のクラスの担任を見つけ、その列の最後尾にふたりはいた。僕の目が止まり、まわりの音がしだいに消えていく。

新城明は、少し前までは僕や卓磨と仲がよく、卓磨とは正反対に勉強はできないがスポーツ万能。人懐っこく、話上手。その話を笑いながら聞いているのは、小無理絵。勉強もできれば、運動神経もいい。卓磨と明のいいとこどり。ちなみに、僕は卓磨と明を足して二で割った感じ。スポーツも勉強も、できるでもなく、わるくもなく。

明と小山さんは、楽しそうに話していた。正確には、明が一方的に喋り、小山さんは聞いているだけだったが、その顔を見る限り、退屈はそうではない。でたため息と一緒にながれ落ちた気がした。後頭部をはたかれて、体が少し前にかしぐ。でも、さっきよりは衝撃は少ない。呟いた言葉は、しっかり聞こえていたようだ。卓磨は、上履きでもいいのに律儀に靴にはきかえていた。ボーとしている本当の理由は、はじめからバレバレで、曖昧に卓磨の顔を見た僕をまた鼻であしらって、

「行くぞ」

とだけ言った。

僕と卓磨を最後に全校生徒の集合は完了した。この後はどこも同じだろう。

「えー、校長の柳田です。皆さんご苦労様でした。放送でグラウンドに出るようにと指示があったから皆さんが集まるまで、10分45秒かかりました。これは少しおそいですね」

だったら抜き打ちでやるなよと、僕が思ったことを悪友が口に出す。しかもわざと大きめのヒソヒソ声で。僕のすぐ前の担任が僕らを睨む。

「私が思うに、おしゃべりが多い。これは緊張感のない証拠です。なかには避難なのに靴にはきかえる人もいますし」

といいつつむけられる目を避けながらふりかえる。ヤロウ、わざと靴紐を結び直してやる。

「とにかく、皆さん本当の地震だと思って、真剣に取り組みましょう。私が、抜き打ちでやっているのもそのためであって……」

校長の視線が外れほっとした。これで後はいつものいいわけが……続かなかった。

「全員動くなあー!!」

聞き覚えのない男の声がグラウンドに響いた。それも真後ろからだ。嫌な予感がした。

「よし、お前人質だ。こっちに来い。」

その一言で、僕は人をかき分けて後ろに向かった。まさかと頭の中で繰り返した。ようやく一番後ろが見えるかと言ったときに、後ろから来た誰かが僕にぶつかり、しりもちをついた。明だ。こいつ! ……いや、それどころじゃない。顔をあげるとそこはぼくの予想があたってしまった。

男は20代ぐらいで背が高かった。無精髭を生やし、パーカーとジーパンを着ていた。ナイフを手に小山さんににじり寄っていた。飛び出して行きたがったが、足が動かなかった。足元にはまだ明が転がっている。飛び越えられると思ったがやはり足が動かない。やめると叫ぶことさえできない。その僕の横を通り抜け、小山さんをかばってやめると叫ぶ人がひとり。卓磨だった。

悲鳴やざわめきが一瞬でやんだ。男がどけと命令しても、卓磨はいつも以上に堂々と嫌だと答えた。そして、ナイフを無視してこっちを向いて言った。

「好きならちゃんと守れ!」

どっちにいったのかは分からない。でも、確実に僕らのどちらか、それが両方に言っているようだった。しかも卓磨にしては珍しく、視線を鋭くして。

数秒の無視は、男をさらに興奮させた。

「おい！無視してんじゃねえ！こっちにはナイフがあんだぞ！分か
ってんのか?!」

男はナイフを突き出して卓磨を脅したが、卓磨は臆せず男をにらみ
つけた。たぶん自分で分かっているんだと思う。避けけることがで
きないことを。たぶん僕も。三人の中で、できる可能性のあるのは
明だけ。でもそいつは僕の前で転がっている。

「よし、ほんとにさしてやらあ！」

そういつて男が動き出すのを合図に僕の足がようやく動いた。間一
髪で僕の体が男と卓磨の間にすべりこむ。覚悟を決めて目を瞑った
卓磨とすべてを見守る小山さんが見えた。そして、男の手が僕のわ
き腹に届いたのを感じた。

僕の頭の中は、意外と冷静に働いていた。せめて死ぬ前に告白を
とか、卓磨の怖がる顔ははじめてだとか。そして、冷静な僕の頭は
どうして冷静かということを考え始めた。なんでだろう…なんでだ
ろう…なんでだろう…あ、痛くないからだ。痛くないから死ぬ気が
しない。

正気にもどって自分のわき腹を見た。血の一滴も出ていない。

「あれ？」

間抜けな声が僕の口から漏れた。朝礼台の校長の横に男が三人出て
きた。一人は看板を持ち、一人はビデオカメラを構え、一人はなにも
持たずに口ひげを生やしていた。看板には『ドッキリ大成功』……
いまだきそんなのない。

ナイフの男が僕から離れ、看板の男が大声で説明を始め、緊張が
解けていく。僕も緊張が解けてまわりを見渡す。はじめに悔しそう
に僕らから顔を背ける明の顔。次に満足そうな校長の顔で、それを
見て、校長のいたずら好きもここまできたら立派なもんだとつぶや
き、僕に向かつて肩をすくめて見せる卓磨。そして最後に卓磨の横
をすり抜けて僕の腕にふれた小山さんの手を見下ろした。

神野透（後書き）

続く………と思います。
たぶん……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7650h/>

高校

2010年12月31日22時24分発行